

第6回島根県保健医療計画学習会の概要

文責 益田の医療を守る市民の会 中川昭生

「周産期医療（お産を中心に）」をテーマに7月25日（金）19時より第6回学習会を開催しました。今回は、益田赤十字病院 助産師の新田 昌子さんに報告していただきました。

1. 周産期医療の概要説明 益田の医療を守る市民の会 中川昭生 資料-1

- ・ 益田圏域では、15年前に医師不足によりお産の数を制限せざるを得ない危機的な状態に陥った。その経過を簡単に報告する。
- ・ 背景として、なぜ全国的に地域医療を担う医師の不足、中でも産婦人科医の不足が起こったのか、2004年に象徴的な二つの出来事があった。
- ・ もともと医師数が少ない中、2004年に医師の新臨床研修制度が開始された。それまでは、医学部を卒業して医師免許を取ったらそのまま、例えば大学病院の消化器外科、循環器内科、小児科、といった各医局に入り医師として診療をしながら研修を受けるのが一般的だった。
- ・ 新制度では、医師資格を得た後2年間は医局に属さずに色々な科を回りながら研修する。その後大学病院や市中病院に勤務しながら専門医の勉強をするという今の形になった。
- ・ この制度で二つのことが起きた。一つは、大学の各医局が新卒医師に研修施設として選んでもらうために研修体制を整える必要性が生じ、地域の医療機関に派遣していた医師を引き上げた。
- ・ もう一つは、今まで卒業後すぐに現場で働いていた新卒医師が2年間は出てこなくなった。一つの大学で毎年100名前後が卒業して診療に加わっていたのが、2年間はゼロになった。単純に言えば1大学あたり200人の医師が消えた勘定。
- ・ 誤解しないでほしいが、今の臨床研修制度が悪いのではなく、むしろとても良い制度だと思う。それまでの医師研修の在り方の方がむしろ問題だったと思っている。
- ・ もう一つは福島県立大野病院事件。この病院は、2011年3月の原発事故により閉院されたままである。当病院でお産をした産婦さんが出血多量で死亡し産婦人科医師が逮捕された。緊急時に対応できる十分な体制がない中でお産をせざるを得なかったのだが、この事件で全国の産婦人科医が委縮してお産を取りやめたり、産婦人科を志す医師が減少したりという状況が加速されたと指摘されている。当時は医療事故や医療訴訟などが社会問題となり、医師や医療機関、特に産科医療に対して非常に厳しい目が向けられていた。
- ・ こうした背景の中で2007年に、津和野、吉賀も含めて益田圏域のお産ができる施設は益田赤十字病院のみとなった（スライド2参照）。
- ・ 津和野共存病院の産婦人科医は、その後益田圏域全体のお産を守るために益田赤十字病院に移り、2011年の産婦人科医が自分一人になる危機に際しても悲愴な覚悟で頑張ってくださった。
- ・ 2008年には、産科医不足で里帰り出産（当時150件程度）が中止となった。
- ・ こうした中で産科医の負担を軽減しようと取り組まれたのが、2009年からの助産師による妊婦健診（いわゆる助産外来）。さらに2014年からは助産師による直接的な分娩介助も含めて妊娠から産後まで助産師が中心になって支援する、いわゆる院内助産が始まり、妊産婦に

もすごく喜ばれている。ピンチをチャンスにする取り組み、光だった。

- ・ 2011年の分娩制限。これは麻酔科医が一人になり、分娩時の緊急対応ができない危険な状況での分娩介助はできない、ということで2人の産科医が引き上げたことによる。
- ・ 翌2012年4月に福山市の病院に勤務していた医師が、益田の窮状を知って赴任を決意してくださり、9か月ぶりに制限が解除された。2014年には里帰り出産が再開された。
- ・ 病院・産婦人科医・助産師等の献身的な頑張り、行政・市議会・地域一体となった取組などが実を結び、今では益田圏域は安心してお産ができる状況になっている。その様子や課題について、新田昌子助産師さんに報告していただく。

2. 周産期医療の現状と課題 益田赤十字病院 新田 昌子 助産師 資料-2

- ・ 周産期医療の現状や課題について報告し、今後益田のお産を守るためにはどのように対応していくべきかを一緒に考えていきたい。

スライド2：厚生労働省のデータ。

- ・ 棒グラフの出生数は徐々に減少。折れ線グラフは、合計特殊出生率で、一人の女性が一生の間に産む子供の数に相当する指標。全国は現在1.20、益田市は、1.76。全国平均よりは高い。

スライド3：益田市の出生数の推移。右肩下がりを示し、少子化は深刻。

スライド4：写真は、現在益田日赤の周産期医療を担っている3名の産婦人科医。

- ・ 産婦人科医や助産師の不足は、特に地方や急性期医療機関で深刻化している。
- ・ 医師の働き方改革が進む中、残業時間削減や休暇取得が難しく、労働環境の悪化が続いている。女性医師が増え、当院でも現在産婦人科医師3人はみんな女性。1歳になったばかりや小学生の子供さんを持つ医師が家庭・子育てと仕事の両立をしており、お母さん医師を助けるために若手医師が頑張っている。夜間にお産対応をした翌日には外来業務をこなす・・・本当に大変な仕事。
- ・ 周産期医療体制の問題として、合併症を持つ妊婦や早産・低出生体重児への対応がある。益田で治療ができない妊婦や赤ちゃんは、ヘリコプターや救急車で出雲や県外の病院へ搬送となる。県内ではまめネットを利用し、医療機関の情報交換がスムーズにいくよう努めている。

スライド5：7月2日の山陰中央新報の記事。

- ・ 隠岐は産婦人科医師1名、助産師2名という厳しい状況。そんな中でもお産を続けていきたいという医師や助産師の強い思いがあり、地域住民を含めてシンポジウムを開くという記事。これは隠岐だけの問題ではなく島根県全体で考えるべき課題だと感じている。

スライド6：ここからは妊婦や赤ちゃんの今の状況。

- ・ 高齢化と合併症を持つ妊婦の増加。第1子出産時の平均年齢が、R6年度は31.0歳、昭和51年は25.7歳だった。ずいぶん年齢が上がってきている。出産年齢が上昇することで、合併症をもつ妊婦の割合が増加している。
- ・ 低出生体重児の増加。体重2500g未満の低出生体重児の割合が増加しており、新生児医療のニーズが高まっている。
- ・ 不妊治療の高度化。不妊治療の選択肢が増加し、倫理的な問題が増えている。

- ・ 周産期死亡率の低下。日本の周産期死亡率は著しく低下し、世界的に見て最も安全なレベルの周産期医療を提供している。胎児の超音波技術の向上により、妊娠期から異常を早期発見でき、出産後は早めに対応できるようになっている。

スライド7：今後の課題…これからどう対応していけばいいのか。

- ・ 産婦人科医の確保。産婦人科医の減少傾向を食い止めマンパワーを確保する必要がある。
- ・ 労働条件の改善。医師の労働時間や負担を軽減し、働きやすい環境整備が必要。そのためにも助産師の確保は不可欠。休日、夜間帯の不必要な受診は避け、市民に救急外来の在り方を見直してもらうことも大切。

スライド8：医療連携体制の整備

- ・ 地域の医療機関間の連携を強化し、合併症を持つ妊婦や早産・低出生体重児への対応をスムーズにする必要がある。
- ・ 解決方法の一つが分娩の集約化。今は松江、出雲、大田、浜田、益田…と、分娩施設が一つの県の中で数か所あり、各施設に医師、助産師が必要。
- ・ 例えば浜田に分娩を集約するとすると、益田の妊婦は、妊婦健診は益田で受け、分娩は浜田へ、分娩後は益田へ帰り産後のケアを受ける。医師や助産師は分散されず、少ない人数でも分娩を取り扱うことができる。
- ・ そうなると、地域の皆さんの交通手段の問題やそれに伴う負担が生じること、分娩を行わなくなる地域の過疎化が進むのではという懸念もある。圏域を超えての集約化の検討は、地域住民の声を大切にし、行政を巻き込みながら慎重に進める必要がある。
- ・ ただ、医師だけでなく助産師不足も深刻。松江圏域では集約化の動きがでている。近い将来、分娩の集約化は必ず必要となるので、島根県全体の医療の仕組みを変えていかないと感じている。

スライド9：これからの課題

- ① ハイリスク妊娠・出産への対応。高齢出産の妊婦や合併症を持つ妊婦が増加しているため、高度な医療技術とケアを提供する必要がある。
- ② 低出生体重児の管理。新生児医療の専門家や施設整備を加速させ、低出生体重児の生存率を高める必要がある。
- ③ 不妊治療の倫理的課題。不妊治療の選択肢が増加する中で、倫理的な問題や情報提供の問題への適切な対応が求められている。
- ④ 情報共有の促進。妊娠中の女性や家族への情報提供を充実させ、妊娠中の不安や心配事を軽減することが大切。

スライド10：現在問題となっているのが、社会的に問題を抱える妊婦。

- ・ 経済的な要因として、不安定な就労、低収入、医療費の未払いなど。
- ・ 家庭的要因として、家族構成が複雑、未婚、離婚、DV（夫からの暴力）の経験など。
- ・ 心理的な要因として、精神疾患、発達障害、被虐待、子育て支援の不足など
- ・ そのほかに、住所不定、貧困、飛び込み出産、未受診、望まない妊娠などがある。
- ・ 社会的にハイリスクなお母さんはもちろんだが、一見普通に経過しているお母さんが、何らかの問題をきっかけに支援を要するケースに一転することはよくある。

スライド 11 :

- ・ そういった問題を見逃さないために、妊娠期から育児期まで医師・助産師・ソーシャルワーカー・保健師などの多職種・多機関で連携し、お母さんの個々のニーズに応じた支援を見出し、問題を早期に発見し、早期に介入することが大切。

スライド 12 : 助産師の仕事を紹介する。

- ・ 助産師は看護師免許を取得したのちに、助産師免許を取得する。看護師と助産師両方の免許を持っている。
(日本看護協会が配信している、助産師紹介の動画視聴)

スライド 13 : 益田赤十字病院の概要。詳細はスライド参照。

- ・ 令和 6 年度の年間分娩件数は 268 件、うち帝王切開は 25% の 67 件。地域周産期母子医療センターの役割を担い、妊娠 30 週以降の分娩受け入れをしている。須佐、六日市、吉賀、三隅など広い地域の妊婦が通院。

スライド 14 : 過去 5 年間の当院における分娩件数及び内訳。

- ・ この 5 年間で約 100 件の分娩件数の減少がみられる。
- ・ 令和 2 年の 1 月よりコロナウイルス感染が流行、県外からの分娩受け入れ時の規制を行い、里帰り分娩の減少がみられる。
- ・ 全体の分娩件数減少は、全国的に少子化が進んできた影響だけではない。女性の分娩や子育てに対する情報が多様化し、出産方法の選択肢が広がり、妊婦が自身の希望や状況に合わせて様々な方法を選べるようになったことも要因の一つと考えている。
- ・ 具体的に言うと、当院では行えていない無痛分娩やリラクゼーションやおいしい食事といった快適な入院環境を求め、安心のみでなく安楽に重きを置く妊婦が増えているように感じている。

スライド 15 : 産婦人科病棟の受け入れ体制。

- ・ ベッド数は 45 床、うち 11 床がベビー病床で 34 床が成人病床だが、産科の患者が少ない場合は婦人科のみでなく、眼科、内科、整形外科などの患者を受け入れている。リハビリ期や終末期の患者、時には看取りの看護もしている。
- ・ 医師は、産婦人科 3 名、小児科 3 名。看護スタッフは、助産師 17 名、看護師 13 名。

スライド 16 : 益田のお産を守りたい！と医師のみでなく助産師も頑張っている。

- ・ 混合病棟なので、他の診療科の患者をみながら助産師業務を行っている。助産師に課せられる業務が以前より増えてきている。
- ・ 助産師の確保は毎年苦慮。今年は新人助産師が一人入職。混合病棟における助産師の確保や育成は、大きな課題の一つ。

スライド 17 : やりがいを持ちがんでいる助産師活動について紹介する。

- ・ ハッピーバースの名称で平成 26 年より院内助産を開設している。助産師が中心となり、正常な経過をたどる妊婦の妊娠期から産後までをサポートする。
- ・ 妊産婦や家族の希望に寄り添いながら、医療介入を最小限にした自然な分娩を目指している。緊急時は、医師と連携して対応できる体制を整えている。こういった体制を院内助産という。

スライド 18 :

- ・ 妊娠期の助産師外来や産後健診の様子。院内助産の一環。助産師が個別で妊婦や産後のお母さんとゆっくり保健指導の時間を設け、心とからだの悩み相談や育児相談などに対応している。
- ・ 超音波を用いておなかの赤ちゃんの体重などを測る。入院中は母乳相談や産後うつ予防のため面談の時間も設けている。

スライド１９：プレコンセプションケアについて。

- ・ WHO は、妊娠前の女性とカップルに医学的、行動学的、社会的な保健介入を行うこと、とうたっている。簡単にいうと、若いうちから男女ともに将来の妊娠なども意識して、自分の心身の健康管理を行うということ。
- ・ 母子支援の重要な活動のひとつとして掲げられ、助産師はその重要な役割を担っている。恋愛、結婚、妊娠、出産を考える中で、LGBT、性感染症、不妊、思春期のやせ、デートＤＶなどについて男女ともに若いうちから知っておく必要がある。

スライド２０：プレコンセプションケアの取り組み紹介

- ・ 地域へ助産師が出向し性教育活動を行っている。これは島根県助産師会の活動。保育園や学校へ出向き、男女のからだのしくみやこころの変化について話し、いのちの大切さを伝えている。
- ・ 幼い頃からのからだやこころづくりが将来の自分をつくる。自分を大切にすること、そして周りの人たちを大切にすることを伝えている。

スライド２１：益田の強みを伝えたい。

- ・ 益田市は人口４万人、分娩施設は１つだけだが、開業助産院が５つもある。そのほかにも行政や訪問看護、個人で整体、性教育、バランスボール、サロンを開くなど、地域でも頑張っている助産師がたくさんいる。
- ・ 当院では、益田圏域の保健師との連携も密になり、地域の保健師や助産師たちにも大変お世話になっている。
- ・ ただ、欲を言えば、もう少し強めたらいいなと感じているのは妊娠期の関り。日赤では助産師外来を通じて妊娠期からの関りを強め産後に繋げている。この妊婦と助産師がプライバシーの守られた環境でゆっくりと話をする時間が、今後のサポートにつなげるためにとっても有効だと実感している。
- ・ 益田市は希望者だけの妊婦訪問になっており、妊婦全員が地域のスタッフと関りが持てている状況ではない。産後に何か問題が生じたときに面識のないスタッフと関わるというのは、産後のお母さんにとってはとてもハードルが高い。妊娠期に全例の妊婦訪問や面談などの時間を設け、出産前からつながりを持てる時間が作られるようになればいいなと感じている。
- ・ 地域で活躍している助産師がたくさんいるので、是非こうした方々の活躍の場を広げ、早い時期からつながりを持ち、切れ目ない支援に繋げることを望む。

スライド２２：益田日赤で頑張っている心強いスタッフのみんな。

- ・ 妊娠期から出産、子育てまで切れ目ない支援を行い、益田のお産を守っていききたい。益田で私たちと一緒に頑張ってくれる未来の助産師也大募集。
- ・ 今後も、ご協力、ご支援、よろしくお願いしたい。